
わたしとボクのぬくもりの距離。

霜月美由梨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

わたしとボクのぬくもりの距離。

【Nコード】

N8566Y

【作者名】

霜月美由梨

【あらすじ】

機織の職の端女である少女が売られ、そして買われた家での物語。

巻（前書き）

平日は18:00～20:00、
休日は10:00を目安に更新していきたいと思います。

壹、

わたしには、名前がない。

物心ついたときにはちゃんと名前があつて、それ呼んでくれるお父さん、お母さんがいたけれど、それもわたしの幼いときに殺されてしまった。

それ以来、わたしは、端女として朝な夕な機を織る仕事についていた。 そんなある日だった。

「おい」

わたしを呼ぶときはいつもこんな言葉だった。振り向くといきなり腕をつかまれ、引きずられて小屋の外に連れ出された。なにかしてしまつただろうか。

そう思いながら周りを見ると、きらびやかな衣を着た、いかにも身分の高そうな男達が私たちを囲っていた。

「こんなので良いのですか？」

わたしを使っていた男は下心のある目で男達を下から見上げて首をかしげる。

わたしだけ、置いてきぼりだ。

「ああ。この女だ。こい」

そういつて男の一人はわたしの腕をとって強く引つ張った。いつものことだ。

わたしは要らなくなったのだ。

荷物を入れるだけの粗末な馬車に入れられてわたしはそう膝を抱えた。

がたがたと荷馬車は進んでいく。

今度の働く場所はどこだろうか。

男達の身なりからして、遊郭ではないことは確かだ。甘い香のにおいもしなければ、怪しい雰囲気もなかった。

いうならば、武官のような、高潔で近寄りがたい雰囲気があった。

「おい」

また、わたしを呼ぶ声。

気がつけば馬車は止まっていて扉を開けられていた。

ボロ布をまとっただけのわたしは、ふらふらと馬車から降りて、目の前に広がった大きな屋敷に息を呑んでいた。

「あ……」

「こちらに」

綺麗な衣をまとった女の人がわたしを誘導する。首をかしげながらその人についていく。

わたしはどこかの家を買われたのだ。

「長旅ご苦労様」

そんなことをいつてくれる女の人を不思議に思いながら、わたしはあいまいに微笑んだ。

わたしは言葉をしゃべれない。声を失ってしまったているのだ。

「声が出ないの？」

こくりとうなずく。かすれた、さっきみたいな声は出るのだが、言葉はまるきりでなくなってしまうている。それはおそらく幼少時の体験のせいだろう。

「いつていることはわかるのよね？」

優しい、いうならばお母さんみたいな声音で女の方は、わたしのお姉ちゃんぐらいの年の人はいった。

わたしはまたうなずく。まともにご飯を食べられていない足には、この屋敷のやわらかい土はきつい。

「大丈夫？」

うなずく。足をとられそうだが、何とか歩いている。だが、すぐに足をとられてしまった。

「おっと」

すぐ上から優しい男の声が聞こえた。そしてふわりとわたしを包み込むぬくもり。

こけたわたしを受け止めてくれたのだ。

「ああ。蓮様^{リエン}」

「この子は？」

「私どもの新しい……」

「この子、あいつにukれないかな？」

「あいつとは、まさか、紅様^{ホン}に？」

驚いた声を上げた女の人にわたしは首をかしげ、そして、優しい香の香りのする衣をつかんで自分で立った。

「ああ、ごめんね。……ああ。だめか？」

「だめって、私どもはそれでも良いですが、でも……」

「この子ならあいつも気に入るよ」

そういつてわたしの頬をそおつと撫でた男の人は、声に似合う優しい面立ちに笑みを浮かべた。

「はじめまして。私はこの屋敷の主の蓮だ。キミは、今日から私の家で働くんだよ」

わたしは声を出せないなりに辺りを見回して女の人に助けを求めた。

「……この子？」

「声が出せないそうです。……なにか聞きたいことがあるの？」
うなづく。紙と筆があれば何とか通じるはず。

そう思つてわたしはしゃがみこんで地面に文字を書いた。

「君、字をかけるんだね。なにになに？ なにをしたらいいかって？
それを聞いて、いわれたことをこなすのが君の仕事だ。それに、
ここの屋敷にある部屋を一つ貸そう。ぜひ、君には私の弟の世話を
してもらいたい」

弟？

そう書くと男の人、蓮さまはうなずいてわたしの頭をそつと撫でた。

お父さんにされていたみたいで、とっても優しい気持ちになれた。
「ああ。ちょっと気難しいやつだけれども、根はすつごく優しいやつだ。
うるさい侍女は嫌だといつていたから、君の声が出ないのは

あいつにとっては良いのかも」

そういつてくすりと笑った蓮さまにわたしはあいまいに微笑んで立ち上がって一礼した。

「よろしく」

わたしの意志をしつかり理解してくれていたらしい蓮さまにわたしはやっと心からの笑みを浮かべられた。

壺、（後書き）

ほとんど設定など練らずに、その場の勢いで書きました。
ので、なんか違う、どこか違うというのは御容赦ください。

壹、

そして蓮さまの案内で屋敷をざっとみた。

温かくて、それでいて、雨風のちゃんとしのげる家だった。

「そして、ここが君に頼みたい人の部屋だ。紅、入るぞ」

そういつて蓮さまは扉を開けて自分が入ると、扉を押さえてわたしが入るのを待っていてくれた。

「なんです？ 兄上」

部屋の奥から男の人の声が聞こえる。

髪をまとめたまま、昼寝でもしていたのか。まとめきれずに顔を覆っている烏羽のような髪に寝癖のつけたその人は出てきた。

鋭く整った顔立ちに陰をにじませて蓮さまをみて、わたしをみる。

「……この子は？」

「今日からおまえの世話をしてもらう子だ。えっと、名前は？」

わたしは首を振ってきょんとした。

侍女に名前などあるのだろうか。逆に聞きたい気分だった。

「……もしかして名前が？」

蓮さまの呆然とした声にわたしはこくりとうなずくと、蓮さまの弟君でいらっしやる、わたしと同じか、すこし上の年の男の人を見上げた。

「……焰^{イエン}」

「え？」

男の人は、そういつてわたしの髪に手を伸ばした。わたしの髪はどここの血を引いているのか、夕日色だった。

「おまえの名は、今日から焰だ」

吸い込まれるような黒い瞳にわたしは我知らずに目を奪われていて、そして、こくりとうなずいていた。

「声が出ないと？」

わたしはもう一度うなずく。

男の人はすこし困ったように眉を寄せて、蓮さまを呆れたような目でみた。

「もしかして、ボクが前の侍女がうるさいといったからですか？」

「いや、それもあるが、今日帰ってきたらちょうどこの子が来ていてね。年も近いから友達にも良いと思って」

「余計なおせっかいを」

「親切な親心さ」

きらんと玉が鳴る音がしそうなほど鮮やかに微笑んだ蓮さまに、男の人は深くため息をついて、わたしの肩に手を回して中に案内した。

「ということで、私はもう行くからな」

「はい。ご苦労様でした」

温かくて大きな手に肩をつかまれてわたしは無意識に男の人に寄り添っていた。

「……ということで、まず君は……。お湯殿で体を清めてきなさい」
「お……」

ゆどの？ と唇を動かす。

そうすると男の人は目を瞬かせて額に手を当てた。言葉を選んでいるようだ。

「体を清めるのに、川に行くだろう？」

こくりとうなずく。わたしは川で泳ぐのが大好きだ。

「そこまで行くのはここでは面倒だから、水を引いてあるんだ。その水をすこし温めて、ためてあるのだが……。そこですこし行水をしてきなさい」

噛み砕いた言葉でそういつてくれる彼の言葉に、わたしはこくんとうなずいて、案内されたお湯殿なる場所に入って、初めての温水を堪能した。

「心地よかったか？」

邪魔にならないように定期的に切っている髪を綿の布で包んで、今まで来ていた衣よりもずっと柔らかで温かい衣に身を包んだわた

しは、彼の側によつてうなずいていた。

「そうか。ならばよかった。……ボクの名は紅、という。覚えていてくれ」

そういつてはにかんだ彼にわたしはうなずいて一礼した。

「そんなにかしこまらなくて良い。……これからは楽にしていってくれ。すこし聞きたいことがあるのだが、いいか？」

首をかしげてみせると、紅さまはすこしいにくそうにしながら口を開いた。

「声は、まったくでないのか？」

その言葉にわたしは首をかしげて肩をすくめた。

正直、どこまで出るのかはわからなかった。

今までそんなものが必要な職業ではなかったから。

「ボクの名をいつてごらん」

「……オン……あ……あ」

やっぱり出ない。音の残滓の音が出るだけで、まったく言葉ではなかった。

のどに手を当てて目を伏せたわたしに、彼は目を細めて小さく笑った。

「大丈夫。これから出るようになる。完全に音が出ないようならばそうはいえないが、ちゃんと音は出てるから」

ゆっくり出せるように練習しなさいと優しくいった彼に、わたしはこくんとうなずいていた。

これが、ご主人様の紅さまとはじめての日のことだった。

壹、

「焰」

「……あい」

一応口を動かしてそういう。言葉ではないがそれでも声を聞いてもらいたくてわたしはいう。

紅さまとわたしは不思議なほど合った。

割れた石の破片がぴたりとはまってもとの石を形付くるような不思議な感覚。

「これを兄上のところに届けてくる。君はここで待っていてくれ」
うなずいて紅さまが出て行くのを見送る。

ここに連れてこられてもう数ヶ月が経つ。

夏の一雨が待ち遠しい日差しが和らぎ厳しい冬の気配をにおわす秋がすぐそこまで来ていた。

ここの屋敷の人たちはみんな優しくかった。

侍女以下の仕事をしてきたわたしに、根気よく仕事を教えてくれ、また、普通に話しかけてくれる。

それは、侍女などの下働きだけではなく、紅さまをはじめ蓮さまや、蓮さまの奥方様もそういう方だった。

なんとなく、わたしの家を思い出した。

わたしの家も、記憶が確かなら、ここまで大きくないものの侍女はいて、家事を手伝ってくれて、わたしの相手もしてくれていた。

「焰さん」

振り向くとすこし気位の高い侍女の一人がいた。正直、わたしはこの人が苦手だ。

「ああいうのは私たちが行くの。わたしがやりますとって、手の書状をとって蓮さまのところに行くのよ？」

すこしきつめの口調にうなずいて謝るように頭を下げる。

「本当に、声でないの？」

バカにするようなその声。

わたしには慣れたその声音。わたしは頭を上げてうなずく。

「こんなに立派なのがあるのに、何故出ないのかしらね？」

ぬつと白い手が伸びて、わたしののどをつかもうとする。

「あっ！」

わたしはなにが起こったのかわからずにのどをつかまれていた。

途端にこみ上げてくる嘔吐感。わたしは顔をゆがめて手をばたつかせていた。

「あ、……あい、で！」

あかんぼうがうにやうにやいつているような声でわたしは抵抗する。

どうしても、のど元や、首を触られるのは嫌いだった。それは、父母を殺されたときにわたし自身ものどをつかまれ殺されそうになったからだろう。

「ほら、声出るんじゃない？」

わたしが本気で嫌がっているのをみて小気味よさそうに笑う彼女。そんな人だったのか。

わたしがばたばたと手をさせているのにもかまわずに、彼女はのどをつかむ指に力をこめて、本当にのどを握ってきた。

「ああああ！」

瞬間膨れ上がる恐怖。

わたしはなににも考えられなくなって、こぶしを握って振り回していた。

「危ないじゃない？」

彼女はそういつて、息が詰まらない程度に握ってくる。その時だった。

「なにをしている！」

鋭い声に、彼女はハツとした顔をしてぱつと離れた。わたしは、ただ狂乱の中にいてわからなかった。

「ああああ！」

暴れるわたしをみて紅さまは驚いた顔をしていたのだと思う。

そして、わたしのど元についた赤い手跡に、紅さまは、あろうことかその侍女の頬を打った。

「貴様はなにをしている！」

怒鳴る紅さまに侍女は屈辱に顔を赤くさせて、声を震わせて申し訳ございません。からかいがすぎました。と白々しくいつてみせる。それでも、紅さまの気は治まらない。

「もうどこへと行くがよい。私はもう貴様の顔などみたくはない」
そういうと侍女を部屋から追い払い、泣き叫び壁にもたれてがたがたと体を震わせるわたしにそつと近づいてきた。

「大丈夫だ。焰」

「いや、いや」

その時は確かに言葉をしゃべれた。頭を両手で抱えて首を振っていた。

紅さまは、わたしに目線を合わせるように床に膝をついてわたしの顔を、涙と鼻水でひどいことになっている顔を覗き込んだ。

「焰」

優しい声音。わたしはぼろぼろと涙を流しながら紅さまの優しい顔をみる。

お兄様である蓮さまよりはするどく整って、すこし近づくことをためらわれるような顔立ちは、時にびっくりするぐらい優しい表情をされる。

「もう、大丈夫だ」

そういつてわたしに両手を差し伸べてそつと抱きこんでくれる。

近くにあるはずのぬくもりが遠くにあるような気がした。

わたしは彼の腕の中に長い時間いたんだと思う。

そして、気がついたときには、紅さまが使われているふかふかの寝台の上で寝ていた。

「焰、いるか？」

蓮さまのすこし焦った声。わたしは慌てて体を起こして、着衣の

乱れがないかを確認したあと、寝室から出た。

「ここにいたか。紅は、そこにいるか？」

わたしは首を横に振った。

いつの間にか日が暮れていて、真っ暗な闇の中、大粒の雨が降り出していた。

「くそ、あいつどこに家出した？」

めずらしく悪態をつく彼に首をかしげて机の上に書き置きがあることに気づいて目を通した。

「焰？」

「……わる、かった？ イエン、の、ふぼ、ころした、の、は、……わが、ちち？」

声が出ることに驚いたが、その内容にも驚いた。

「……父上が君の父母にも手をかけていたのか？」

「ちち、うえ」

まだ、かすれる声で首をかしげると、蓮さまは嫌な予感がするといつて、詳しい話は紅が戻ったらするといつて部屋を出て行ってしまった。

壹、

わたしも嫌な予感がした。

その予感にしたがつて、屋敷の外に出ていく。服を汚してはもつたいないからと、元のボロ布を身にまとい外に出る。

この時間帯、だれも外に出ないのだろう。わたしは、部屋から一本失敬してきたひもで髪をくくって、走り出した。

どこにあてがあるというわけではなく、ただ予感の知らせた場所へ、走る。

屋敷の格子窓からみていて思ったのだ。

ここはふるさとなのではないのかと。

あの川の流れや、あの里山。この屋敷の近くにある町になんて見覚えがありすぎて驚いた。

そして、町に連れて行ってくれた紅さまが、その町の人に恐れられているということにも、驚いた。

町の人曰く、紅さまは先代さまにとっても似ているそうで、それが怖いとっていた。

どこの流れ者かわからないわたしに名前をくれて、なおかつ町に出て行かせて遊ばせて、欲しいものを買って与えてくれるような優しい方がそう恐れられていることがわたしは口惜しかった。

そう、紙に書くと、彼は、珍しく頬を染めてそっぽを向いた。

「そんなこというんじゃない。……はずかしい」

そついう彼にわたしはにっこりと笑っていた。

びたりと雨戸の閉められた家の隙間を走る。

泥が足だけでなく、太ももや全身にかかる。それでもわたしは走るのをやめなかった。

「さま、……」

ポツリと呟く声が意外としっかりしたものだ。ドクンと嫌な

予感が胸を締め付ける。

「紅さま！」

そう叫んだ声が、普通に出た。

わたしは驚きながら辺りを見回す。町を通り抜けて里山の裾野まで来ていた。

足がもつれて転ぶ。体を打つ雨が大粒で、冷たくて痛かった。

「紅、さま」

わたしは立ち上がって、もつれる足でまた走り始めた。

秋の色が香りはじめたその裾野をすぎて、真新しい塚や朽ちた石がぽつんと置かれているだけの墓場にやってきた。

なぜ、ここにきてしまったのかはわからない。だが。

すこし離れたところに見えた人影に、わたしは驚いていた。

すこし朽ちた土盛りの正面にひざまずいてうなだれる人が一人。

その人の衣は色鮮やかな涙色。

「紅さま！」

叫んで、駆け寄る。

その土盛りがだれのものであるかはどうでもよかった。部屋着の単ではこの雨は冷たすぎる。

そう思っ隣に座り込む。不思議なおいがした。

すこし、生臭いような、金物臭いような。紅さまの傍らには綺麗に磨かれている一つの短剣がある。そして、うずくまったからだが見え隠しているのは。

「……紅、さま」

右肩を左手で押さえてピクリとも動かない、彼にわたしはまた声をかすれさせていた。

「いや……」

「う」

かすかにその背中が震える。わたしは夢中でその背中に手を当てた。

「紅さま」

呼びかけると、雨に打たれて、傷の痛みに顔を白くさせた紅さまがこちらをみるように首をめぐらせて声を詰まらせ、そして、目を細めた。

「ああ、焰……」

吐息だけのその声にわたしは首を振っていた。

「いや、嫌です、紅さま！」

声が出るように云々の前に、ただただそれだけだった。

震える背に手を当てながらわたしはそれだけをいつていた。

「……もうし、わけ、ない。………ごめん」

ちいさな、ゆっくりな呟きと共に、彼の体から力が抜けていく。

「だめ！」

そうゆすつても、彼は痛そうに眉を寄せながらも、それでも申し訳なさそうに、していた。

「いやあああああああああ！」

そして、彼のまぶたが完全に閉じた瞬間、わたしは叫んでいた。

壹、

それは幸いだったのだろう。

その金切り声に、不審に思った町の墓守の老人が見に来て、私たちを発見してお屋敷に伝えてくれたのだった。

お屋敷からの使いの人たちが、私たちを屋敷まで連れて帰り、紅さまは居室の寝台上で、薬師の治療を受けていた。

わたしはというと、放心状態が続いて、促されてようやく、お湯殿で体を清めて、元の侍女の服を着込んだ。

「よく、見つけてくれましたね」

泣きはらしたわたしの顔に蓮さまはいたわるようにいった。

わたしはうつむいてぶんぶん頭を振っていた。

「父が、ここによってきてバカ息子を成敗してくれたといったときはわたしも、焦りましてね。あの父はどこかがいかれている人ですから、剣で聞かなければならないと思って、気だけが競って気がついたら口が利けないほど痛めつけてしまっていましたよ」

蓮さまは苦笑気味にそういつて、机に用意された急須にお湯を入れてお茶を二つ入れた。

本当はわたしの仕事なのに、なんで体は動かないの。

「どうぞ。すこし温かいものでも飲んで体の力を抜いてください。あれは大丈夫です」

紅さまの傷はひどいものだった。

右から左は斜めに切られ、あとすこし入っていれば、死は免れなかっただろう。

そして、とつさに後ろに跳び退って刃の入りを浅くしたのだろうと、ざっと状態をみた薬師の人がいつていた。

「でも……」

「大丈夫。私たちの一族のものは皆傷の治りが早いのです」

それに、そこらの虫並みの生命力もありますからと朗らかに笑っ

てみせた蓮さまにわたしはなにも返せずに、ただ、入れてもらったお茶を両手に持って、静かにすすった。

「……そうだ。先ほど、いったことですが」

わたしは顔を上げてそれに応じる。おそらく、置き手紙のことだろう。

「私どもの父、先ほどもいったように頭がおかしくて、虫の居所が悪いだけで村や町に下って人を切り殺していた」

「……」

なにもいわずにわたしは蓮さまを見上げる。蓮さまはそっと目を伏せて眉を寄せた。

「私の母も、そのせいで……。紅の母親は、紅の目の前で殺されて

……」

「え？」

かすれた声に、なってしまった。蓮さまはさびしげに笑ってそっと目を閉じた。

「自分の中にも、あの男の血が入っているなんて信じたくないんです。紅は特に。でも、その姿は父の生き写しで……」

そう呟いた、蓮さまは涙を流しているように見えた。

だけれども蓮さまは泣いているわけもなく、ただ小さく笑ってみせて目を開いてわたしを優しく見つめた。

「おそらくあなたもその町の出身なのでしょう。町人が、ユイに似ているといっていましたから」

「ユイ」

「おそらくあなたの本当の名前。字はわかりませんが」

「……わたしにはもう、紅さまがつけてくださった名前があります」

「ええ。それでも、名は父母からの贈り物。大切に胸の中にしまっておいてください」

優しく笑った蓮さまにわたしはこくりとうなずいてぬるくなったお茶を見下ろした。

「蓮」

落ち着いた、薬師の声。

はっと顔を上げると、難しい会話を蓮さまと薬師がして、そしてその会話が一段楽しいたところで蓮さまがわたしにうなずきかけてくれた。

「今は意識がなく、傷が膿んでいて大変な状態らしいですが、とりあえず大丈夫みたいです。さ、いつておやりなさい」

温かいその言葉にわたしはうんとうなずいてお茶を置いて、蓮さまの居室を抜けてすこし離れたところにある紅さまの居室に入って寝室に足を踏み入れた。

「う」

かすかなうめき声が聞こえる。

そろそろと移動して寝台の側に座ると、包帯に覆われた肩がすこしだけ布団から出ていた。

「紅さま」

と呟いても答えるべき人は深い闇のそこにたゆたっている。

布団を首元までかけてやると紅さまはかすかに目を開いてぼんやりと天井を見上げた。

「紅、さま？」

小さく呼びかけると、紅さまは左手を出して、痛み顔をゆがめながらこちらに差し出してきた。

「どうしました？ お水でも？」

その言葉に紅さまは小さく首を振りながら辛そうに目を細めた。ぎゅっと体の奥が締め付けられるような感覚。

震える大きな指先をそっと包み込みながら、わたしはしっかりと握っていた。

「紅、さま？」

紅さまは指先の感触にすこしだけ、眉によっていたしわを解いたようだった。

雨に打たれて、そして傷が膿んで熱が出ているのだろう。

荒い呼吸の中にも安堵の吐息をほうと漏らしてそのままずっと

寝台に体を預けて眠ってしまった。

「焰さん」

背中から優しい声が降ってきた。

わたしを最初に案内してくれた侍女の先輩、春さんだ。

「今日から紅様の身の回りのお世話をしなさい」

うんとうなずいて、わたしは春さんを見上げる。

「大丈夫。あなたがしていた仕事は私が引き受けるから。あと、あのバカ娘やってみたよね。一人減ってしまったけれども暇している侍女は多いのよ？」

あなたと違ってねと笑う春さんにわたしはすこしだけ笑ってこくりとうなずいて、お願いしますと頭を下げた。

春さんは笑いながらうなずいて、ふと、紅さまの左手、わたしが握っている手に目を向けた。

「それは紅様が？」

驚いた様子の春さんにわたしはうなずいて、笑った。

「そう。ならばなおさら側にいて差し上げなさい」

深い声の春さんはなぜか泣きそうに眉を下げた。そして、あと忙しいからと外に出て行ってしまった。

「紅、さま」

高い熱にかすれた声を上げてうめき、眠っている紅さまの手をきゅと握り締める。

まだ、この冷たい手には力がない。

だけれども、絶対回復してわたしの手を握ってください。

わたしはそう思って、片手を彼の手に残して、もう片手で汗に凝った額をそっと、ぬらした手ぬぐいで拭いていく。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8566y/>

わたしとボクのぬくもりの距離。

2011年11月29日19時58分発行